狼の詩

十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
狼の詩

【Ｎコード】
Ｎ４３８９Ｌ

【作者名】
十夜

【あらすじ】
大きな犬を追いかけていたら、交通事故にあってしまう主人公。目覚めたところは、森に囲まれた草原。そこに現れたのは、なにやら奇天烈な格好で馬に乗り弓を携えた男たち。動物を崇める人々と現代っ子の主人公が繰り広げる異世界なんだかタイムスリップなんだかの物語。

プロローグ

鼻先をくすぐるのは、少し湿った木々の香り。
肌をなでるのは柔らかな草。
包み込むように注ぐのは、温かな陽の光。

なかなか思うように動かせない手足で懸命に追いかける先には、兄弟の背中がある。
自分より少し大きな体をした兄弟には、いつもこうしておいていかれてしまう。
けれども、いつも少し先で彼女を待っていてくれる。
思い切り駆ける喜びに息を弾ませ、誇らしげに耳をぴんと立てながら、いつまでも追いついてこない妹を待ち切れずにそわそわと歩きまわり、せわしなげにしっぽを振りながら輝く瞳で彼女を見つている。
そんな兄弟に思わず笑い声をあげながら、一層手足に力をこめて駆けより、とびつき、じゃれかかる。

遠くから彼らを呼ぶ声がする。
父が戻ってきたのだろう。
一瞬目を合わせて、二人はまた駆けだした。
今度は、二人を待つ父親のもとへ。

暗転。

ぼんやりとした光の中で、一匹の犬が走っている。

灰色とも銀色ともつかない美しい色の毛で、太くどっしりとした足、磨かれた黒曜石のように深い黒の瞳に鋭い光を帯びた大きな犬だ。しばらくするとふいに立ち止まり、向かう先を疑うように睨みつける。

何かを探し求めるように視線をゆらめかせ、においを嗅ぐように鼻を高くあげながらあちこちを探っている。

何のてがかりも得られない様子で、またどちらとも知れぬほうへ駆けていっては立ち止まる。

それをまるで映画でも見るように見ている。

こちらは暗く、そちら側からは切り離されているようだ。

必死に何を探しているその様子を見ていると、胸が苦しくなる。

訳が分からない焦燥に駆られて、思わず叫んでいた。

「私はここにいいる！」

プロローグ（後書き）

誤字・脱字ありましたらご連絡お願いします。

出現1

目を開けると、見慣れない木目の天井が飛び込んできた。
一瞬体をこわばらせて記憶を探ると、すぐに力が抜ける。
そうだ、昨日からゼミの合宿に来ていたのだった。
息を吐いて体を起こしながら、目を開く直前まで見ていた映像を頭に浮かべてみる。
（きれいな犬だったな。毛並みが銀色に見えた。）
それに自分が犬になって駆ける夢も見た気がする。

――いい気分だ。珍しくすっきり起きれたし散歩でもしてみるか。

那月は、朝が弱い。
たまに目覚めよく起きれた日くらい爽やかな朝を満喫してみるのもいいかもしれない。
何より昨日から合宿でやってきたここは、普段暮らしている東京と違って自然溢れる山の中だ。
空気も澄んで気持がよさそうだ。
お気に入りのボーイフレンドジーンズに、Tシャツ。
まだ肌寒いだろうからジャケットを羽織り、長い髪を無造作に束ねて出発した。

「んー、気持ちいい！」
少しひんやりした空気が肌に心地いい。
ログハウスを出て適当に歩きながら、那月はひとりにやけた。
昨夜のゼミ討論会はひどかった。
あれじゃただ合宿にかこつけた宴会だ。単に夜通し騒ぐためにここに来たんじゃないだろうか。
今頃みんな二日酔いで唸ってるだろう。

――いやー、酒に強くてよかった。
おかげで、この特別気持ちのいい朝も独り占めだ。
実際、合宿なんぞ来る暇があったらバイトでもしていた方がよっぽど有意義だった。
このこのこやってきたのは、野生の動物が見れるかもしれないとゼミ仲間に唆されたから。
去年きた先輩は、鹿やらリスやら見かけたらしい。
（見たいじゃないか！）

「動物がいそうなところは・・・」
敷地の外の車道の先は、もう鬱蒼とした森になっている。
何かいやしないかと、目を凝らして木々の間を見てみると、一瞬なにかが動いた気がした。
（なんかいる！尻尾？）
足音をたてないようにそろりと森のほうへ近づいてみる。
黒っぽい尻尾が太い木の陰に隠れたと思ったら、反対側からぬっと頭が出てきた。
（犬？でっかい・・・！）
地面から頭が1メートルくらい離れている。
食われてしまいそうなほど大きな犬だ。
（まだこっちには気が付いてないみたい。）
きょろきょろとして何かに気をとられているみたいだ。
身の危険を感じてもおかしくないような巨大な動物なのに、もっと近くで見てみたい気持ちを抑えられない。
動物から目を離せないまま、さらにちょっとずつ足を進める。
もう少しで森の手前の車道に足をかける、というところで犬がさっとこちらを向いた。
その目がすっと細められる。
（近づきすぎた！この距離なら一瞬で飛びかかられてしまう！）
体を強張らせながらも、那月はまだ獣から目がはなせない。

ーーーきれいな黒曜石の目だ・・・どこかで見覚えのあるような。
その時犬が耳をぴくっとさせ、はっとしたように顔をあげて体の向きを変えた。ーー那月に背を向けて。

「あっ、・・・待って！」
思わず走って後を追おうとした。

キキキィーーーーッッッ！！！

ブレーキの音に気がつくと、もう避けられないほど近くに巨大なトラックが迫っていた。
（嘘でしょ、なんで気がつかなかった・・・！！）
（車の音なんて聞こえなかったのに！）
トラックは急ブレーキをかけているが、どう見ても間に合わない。
（後ろに戻るか、前に飛び出すかしないと・・・！！）
もう視界いっぱいに白い車体しか映らない。
逡巡している間にも避けなければならないのに、体が動かない。
「これは、死ぬ。」
目を見開きながらも妙に冷静につぶやく。混乱しすぎて、怖すぎて、なんとか自分の頭をはっきりさせたくて。
ーーーこれで死ぬの？こんなに簡単に？私はまだ何も得ていないのに？
思わず目をつぶった。衝撃に備えて。

出現１（後書き）

誤字・脱字ありましたらご連絡お願いします。

出現2

ふかふかする。
ほかほかする。
べろべろする。

（・・・べろべろ？）

「なんじゃあ！」
那月はカッと目を開けた。
なんか顔半分がちくちくすると思ったら、地面に横になっていた。
丸くなってる自分の体の足先をみると、なにやらふさふさしたものがぱたぱたと動いている。
そして再び、べろっとやられた。ほっぺたを。

慌てて起き上がると今まで背中にあったぬくもりとの間に空気が入って少し寒い。
恐る恐る振り返ると、巨大なやつがいた。
でろんと地面に寝そべって頭だけあげている。
ぴんと立った耳に、灰色っぽくてつやつやした毛並みに覆われた重そうな手足に長い尻尾。
とにかくでかい図体は、立ちあがれば那月よりもあるだろう。
そして、真っ黒な瞳。
―――あの犬だ。

「ちょっとあんた！あんたのせいであたしはトラックにひかれたんだからね！」

一言言っておかなくては気が済まない。

なにしろ、こちらはこいつに気をとられて死ぬところだったのだ。
那月は怒っているというのに、犬はしっぽを振って何やら嬉しそうだ。
心なしか目元が笑っている気がする。
「ちょっと！ききなさいよ！」
びしっと指をつきつけると、その指すらべろっと舐めようとする。

―――あれ？そういえば死ぬところだったんだ。なんで？生きてる・・・。
手足を動かして、怪我しているところがないか確認してみる、までもなくどこも痛くない。
―――いやいや、怪我もなく済むはずがない。だいたい避けられなかった。あのスピードでは・・・。
そういえば、あのトラックの方はどうなっただろうか？
まさかひき逃げ？

立ちあがってあたりを見回してみて、改めて硬直した。
車道なんてない。
３６０度森に囲まれた原っぱだ。
ちょっとした公園くらいの大きさの原っぱに、那月とこの獣しかいない。

「ここどこ？」
答えるものもいないのに、思わずつぶやいた。
意識を失っている間にこの犬に連れて来られたのだろうか？
―――何のために？
決まってる、食べるためだ。
何しろ野性だ。人に飼われている感じではない。
そう気がついたと同時に、相手はすっくと立ち上がり、身を低くし

て構える姿勢になった。
（あわわわわわ！）
「た、食べられる・・・！」
あまり刺激したくないが、どうも那月は慌てるとなんでも口走る癖がある。
のしっと一歩踏み出してくるので、ぎぎぎとぎこちなく後ずさる。
「お、おいしくないよ？」
無駄かもしれないが説得を試みる。
が、当然ながら無駄だった。
ぎざぎざした歯がびっしり並ぶ大きな口を開けて、がぶっと噛んだ。
那月の袖を。
「ふわわわ～っ。ちょっと待って、おちつけ！」
と騒ぐ那月をよそに、犬は鋭い目で森の奥を睨みつけ、その反対へと引っ張っていこうとする。
何やら様子がおかしいことに気がついた那月は、彼（彼女？）が視線をやっている森の奥に目をこらした。
「なにかいるの？」
もちろん返答はないが、そちらからドドッ、ドドッと音が近づいてきた。
続いて、馬のいななく声がする。
（近くに牧場なんてあったっけ？）
記憶を辿ろうとする那月を、犬がものすごい力で引っ張っていく。
―――人間に見つかることを警戒しているんだ。助けを求めよう！
抵抗し始めた那月に目をやり、「いいからこっち来い」という感じでさらに強く顎をひく。
そして次の瞬間、思い切り右側に跳ねた。
同時に、那月の左のほおを風が通り抜けた。
はっとそちらを見やると、今まで立っていた場所の少し先に矢が突き刺さっていた。

「矢。」

（頭に刺さるところだった？）

呆然としていると、反対の森から馬に乗った2、3人の人影が出てきた。

遠目にも分かるくらい派手な色彩をまとい、こちらに向かって弓らしきものを構えている。

助けようとしてくれたのかとも思えたが、先ほどの矢は那月に当たるところだった。

（しかも、今時弓ってなんだ。たちの悪い悪戯では済まされない。）

それに、よくよく考えると犬は那月を逃がそうとしているようにも思えた。

「あっちが危険なら、そうと早く言ってくれればいいのに。」

と無茶を言いながら今度こそ、一緒に走りだそうとした。

しかし、馬の駆ける音がどんどん近付き、今度は地面を蹴ったばかりの足元に矢が刺さった。

犬が後ろをさっと振り返ってから、那月の目をじっと見た。

ものすごく何か言いたそうだ。

そして、ぱっと袖から顎を離すとびゅっと駆けて目前に迫っていた森に飛び込んで行ってしまった。

「置いて行かれた。」

泣きそうになりながらもとっさに後を追おうとしたが、叶わなかった。

目の前に黒い大きな馬が飛び込んできたからだ。

「止まれ。」

剃刀を首に当てられたようにぞっとする低い声が言った。

そして、実際首に刃物を突き付けられた。

（今度こそ死ぬ。）

那月は息を吸い込んだ。

出現２（後書き）

誤字・脱字ありましたらご連絡お願いします。

出現3

（逃げなければ！）

刃を振り切って体が走りだそうとするのを、全身に力を入れて抑えつける。

――こんな連中と関わり合いになったら碌なことにならない。

理性がそう警告しているけれど、那月の感覚の方がそれに逆らっていた。

万が一、少しでも動くそぶりでも見せたらこの槍の様な刃物を突き付けてくる男は迷わないだろう。

そう那月に思わせるほど、目の前の男は普通ではなかった。

（だいたい、槍って何よ。原始人か！）

那月の頭の中で、槍をもって喜ぶのは、小さな子供とテレビで見たことのある道具を使い始めた原人だけだ。かなり狭い認識ではあるが。

息が詰まるようなプレッシャーに思わず後ずさりしそうになった。

「動くな。」

後ろから声がして、両腕を後ろに引っ張られ、無理やり地面に膝をつかされる。

その間に目の前の男が馬から降りた。

遠くから見ても派手な服装だったが、近くで見ても呆気にとられるほど奇妙だった。

赤い地に不思議な模様の刺繍を施した短いポンチョの様なものをかぶり、その下には簡素なタンクトップ、筒の太いズボンに、これま

た赤い布を腰に回して脇にたらし、足元は変わったサンダルの様なものを履いている。
見上げるほど背が高く、威圧感溢れる逞しい体つきで、何より肌が浅黒かった。
（日本人じゃない？）
日に焼けた色ではなく、生まれ持った肌の色のように見える、薄いココアの様な色だ。
脇に立つ男も、那月を後ろから羽交い絞めにしている男の腕も同じココア色だ。
（近くに移民の多く住む地域でもあるのかな？でも、稼ぎどころもなさそうなこんな山奥に移住してくる人々がいるとも思えないけど。）
その上彼らは、弓やら槍の様な刃物を携帯していて、派手なアクセサリーをじゃらじゃらつけて、それぞれ刺青の様なものまで見える。
（こいつら得体が知れないけど、柄が悪い連中だってことは間違いない。）
普段から、こんなチンピラの様な輩は避けてきた那月だ。
最悪のシナリオがありありと頭に描かれている。

「私お金持ってない。だから離して。」
相手を刺激しないように、極力やんわり声を掛けてみる。
だが、先ほど那月に槍を突き付けた男は露ほども表情を変えず、那月を睨みつけている。
「ほんとに何も持ってないよ。ここであったこと誰にも言わないから、離して！」
那月の言葉を歯牙にもかけない男の態度に焦った声をだしてしまう。

「ここで何をしていた？」
男は切れ長の青い目を細めて、何かを抑えるように静かに聞いた。
ーーーなにって、こっちが聞きたい。車にはねられそうになって、

気がついたらここにいた。
自分でも説明できない状況に、自然那月の目が男から逸れた。
その様子を逐一追っていた男は、目配せをした。
「何をしていたかと聞いている。誰の命令だ！」
さっきより脅す気配を露わにしたと同時に、後ろにいた男が素早く那月の体を探り始めた。
「何すんの！離して！触るな！」
手足をめちゃくちゃに動かして振り払おうとしても、両膝を無理やり地面に押さえつけられているため全く動けない。
———なんで、こんな扱い受けなくちゃいけないの？
刃物を向けられ、手足の自由を奪われ、訳のわからないことで問い詰め脅されている。
恐ろしさに、そして悔しさに目の周りが熱くなってくる。
「あんたの言ってること意味分かんない！あたしには関係ない！離してって言ってるでしょ！」
涙交じりに叫ぶ少女を冷やかに見下ろして、男は苛立ったように再び槍を構えた。
その時、場違いなほど穏やかな声が那月の背後から聞こえた。
「ここはまずい。ひとまず連れて行こう。」
「あっちに見つかったら、それこそ疑われるだろ。会合が始まるまでは事を荒立てない方がいい。」
この緊迫感の中で、どこか飄々とした男の発言に、那月は無意識に止めていた息を吐いた。
目の前の男は暫く黙りこんだ末、渋々といった感じで頷くと再び那月に視線を戻した。
「縛って連れていく。」

がっしりした体から想像もつかないほど軽やかに馬に飛び乗る男を、呆然と眺めていると、手を後ろで一括りに縛られ、あっと思った瞬間には馬に放り投げるようにして乗せられていた。
乗せた本人は、どうやら背後で那月を羽交い絞めにしていた男のようだ。
細い眉に、灰色っぽいたれ目が印象的で、灰色の混じった黒い髪は耳の前で両脇に一房ずつ垂らし後ろはおかっぱのように短くなっている。
（変な髪形・・・。この人には、助けられたのかな？）
希望的観測だろう。何しろ、手を縛られて身動きが取れないようにされている。

「ピッピー、ピッピー」

鋭い鳴き声に空を見上げると、真っ青な空に大きな鷹が翼を広げて舞っていた。
―――ああ、なんて気持ちよさそう。
「空が飛べたらな・・・。」
那月はなんとか現実逃避をしたかった。
この場で、殺されるような最悪なケースは免れたけれど、事態は全く好転していない。
何やらチンピラ同士のいざこざに巻き込まれたような状況だった。
―――私がいなくなっても、探してくれる人はいるだろうか。
一緒に合宿にやってきたゼミ仲間ならさすがに探してくれるだろうが、彼らも今日の午後には東京に帰る予定になっている。
彼らに置いていかれれば、私は一体どうなるのだろう。

出現3（後書き）

誤字・脱字ございましたらご連絡お願いします。

出現４

ーーーお尻が痛い。
那月の意思とは関係なく初めて乗った馬の背中はあまり居心地が良くなかった。
揺れる度にお尻が打ち付けられる上に、両手は縛られているので後ろの男が支えてくれるとはいえバランスがうまくとれない。
鬱蒼とした木が生い茂る森の中の道とも言えないような小道を進み、やっとテントのある広場に出た時、とりあえずこの苦痛からは逃れられると那月はほっとした。

馬から降りた男が脇の下に手を添えて降ろそうとする。
那月は馬に跨っているというのに、この男の顔は那月とほぼ同じ高さだ。
（背が高いな。そういう民族なのかな。）
男が穏やかな雰囲気なので改めてじっくり観察すると、なかなかのイケメンだった。
割と大きな目はくりっとして子供のようだが、それをこめかみから覆ように上下に施された鋭い鉤爪に似た３本ずつの黒い刺青とまっすぐ伸びた眉が油断禁物と告げていた。
薄い唇は面白そうにくいっと持ち上げられている。
「おれの顔に何かついてる？」
にやにやと見下ろしてくる男にはっとなって那月は目を逸らした。
（何をされるか分からないんだから、気を引き締めないと。）
「さ、シャンが待ちきれないみたいだよ。」
またもや面白そうな男が、那月の腕を引き示した先には、先に着いていたらしいあの凶暴な男がいた。
しかし、那月の視線はその背後に釘付けになった。
「なにここ。キャンプ場？チンピラ達の秘密基地？」

テントに見えたものは、地面に突き刺した長い丸太を何本か先っちょの方で組み合わせて円錐にし、そこに派手な模様の布をぐるりと巻き付けていて、那月が始めてみるものだ。
6、7個建てられたその合間を、ココア色の肌で奇天烈な格好をした若者たちが行き交っている。
ある者は馬にブラシをかけ、ある者は薪を正方形に組んで何やら作っており、またある者は大きな鍋を抱えて忙しそうだ。
チンピラ共のアジトに連れて行かれると思っていた那月は違和感を感じた。
酒やらタバコやらふかした不健康な輩が集まる危険な場所に連れて来られると思っていた。
―――何かがおかしい。
いや既に十分おかしな状況だが、もっと根本的な何かがひっかかる。
合宿で山奥に来たとはいえ、テレビですらこんなテントや服装を見たことはない。
―――まるで映画の撮影所みたい。

「アル、何をしてる！早く連れて来い！」
テントの一つに入りながら槍男が怒鳴る。

「へいへい。」
やれやれ、とでも言うように肩を竦めた傍らの男がやんわり那月の腕を引っ張る。
「ちょっと待って。あそこに連れて行って何する気？」
どっと足元から震えが襲ってきて那月は立ち尽くした。
「さっきから言ってるけど、あたしは何も知らないし、お金もなにも持ってない。」
声が震えそうになるが、それでは相手に舐められるだけだ。
なんとか堪えようとすると、声は固くなった。
それを眺めて眉を下げたアルと呼ばれた男は声を低くして囁いた。

「あんたが何者で、あそこで何をしてたか知らないが、今は正直に言った方があんた自身のためだ。」
脅しにも聞こえるその言葉は、静かで諭すような響きをしていた。
「時期が悪かった。あいつが暴走したらおれでも止められないよ。正直に話すんだ。」
（この人は味方なのだろうか？さっきから少し気遣ってくれているように感じる。）
あのテントに入ってしまえば逃げ場はますますなくなる。
分かっていたが、拘束されている以上従う以外にどうすることもできない。
仕方なく那月は足を踏み出した。

薄暗いテントの中には、キツネがいた。
ふかふかしてそうな大きな尻尾が目印だ。
「なんでキツネ・・・。」
これから最も緊張を強いられるだろう場面で、強面の二人の男と一緒に大人しく伏せたキツネがこちらを上目遣いで見ている。

「正直に話せばお前自身には何もしない。あそこで何を仕掛けていた。」

先程からずっと那月を凝視していたらしい槍男は痺れを切らしたように言った。
（またその話か。）
なんとかキツネから意識を放し那月は、うんざりした思いでため息をついた。
———思い込んだら人の話を聞かないタイプの男か。
何より目つきが悪い。瞳は驚くほどきれいなくすんだ青色だが、如何せん鋭すぎる。
くっきりした二重瞼は魅力的だが、このぶっちょう面では台無しだ。

眉はきりっとして如何にも頑固そうだし、鼻もすっと高いがきつそうな印象、口に至っては真一文字に結ばれている。
そして、やっぱり変な髪形だった。
髪の色は黒だが背中の中ほどまであり、後ろで高くひとつに括られているが、その束にはドレッドのように編まれたものやら飾りがついたものやら色々混ざっている。
左耳の前でダラーンと垂らした一房には、シルバーの筒の様なアクセサリーやらの飾りがついて、おまけに先っちょには鳥の羽が下がっている始末。
（どういうセンスだこいつ。）

「ルーグ族の者だな？明日の会合の前に何を仕掛けようとした？」
那月が悠長に男を観察している間に、もう一人の男が剣呑な雰囲気で続けた。
同時に脇にいたキツネが那月を探るよう鼻先を伸ばしてくる。
―――曖昧なことしか言えないけど、ありのままを話した方がいいか。
これ以上面倒な事態になっても困る。

「私は何か意図があってあそこにいた訳じゃないし、ルーグ族とやらも知らない。今朝不注意でトラックに撥ねられそうになって。そこから記憶がないんだけど、目が覚めたらあの原っぱにいたの。私が思うに、あの犬に連れて来られたんだと思うけど。」

「何を訳の分らん事を言ってる。おまえの容貌はルーグに近い。それをどう説明するつもりだ。それに今、我らに近しい一族に狼と縁を持つ者はいない。」
那月の一挙一動を見逃すまいとする、槍男の厳しい視線が刺さる。
「だから、ルーグってなによ。知らないって言ってるでしょ。それ

に狼と縁ってどういう・・・・。」
（狼？）
「おれ達が辿りつく前に共にいただろうが、狼が。ごまかせるとでも思ったのか？」
尻尾でも掴んだかのように問い詰めてくる声につられて思い出してみる。
（べろってやられた・・・・。）
「あいつか！・・・・えっ！あれ狼！？」
突然動揺して、、半ば立ち上がる不審者をますます疑い深げにシャンは見やった。
「どうりで大きいと思った！じゃあやっぱり食べられるところだったってこと！？」
「いいかげんにしろ！そんな誤魔化しが聞くと思ってるのか！話す気がないなら、お前の指を一本ずつ切り落としてから聞いてやってもいいんだぞ！」
いきなり、凶器のように大きな手が伸びてきて那月の喉を掴んだ。
太くてごつごつした指に徐々に込められる力に那月は怯えた。
だが、それ以上に腹の底から熱いものがぐつぐつと湧き上がってくるのを感じる。
理不尽なこと、不当なことを何度も迫られ押しつけられた怒りだ。
「離せ、この変態槍男！話聞けって言ってんでしょ！何も知らない！」
キュッ鳴いてキツネが小さくなる。

――こんなやつ殴ってやる！
腕を振り上げようとした瞬間、那月の喉元を捕えていた手を、アルの手が掴んだ。

「やめろ、シャン。明日ルーグの首領に会わせてみれば済むことだ。それにこの子は、おん・・・」
「相変わらず野蛮だな、シャン。誇り高いシャイアンが、その様にか弱い者を押さえつけるなど。」

アルが止めに入ろうとした瞬間、テントの入り口を押し上げて入ってきた男が高らかに言い放った。

「この男が乱暴なことをしたな。すまない。」
涼やかな黄土色目をした美青年だ。
一瞬那月がぼおっとなってしまうほど、彼の容姿は飛び抜けていた。
長い髪は右耳の下できっちりと3本に編まれて垂れている。
左腕を2周している蛇のような刺青が気にはなったが。

「今は微妙な時期でね。どうしても疑い深くなるのを許してほしい。申し訳ないが、君は誰で、どこから来たのか教えてくれないか？」

苦虫を噛み潰したかのような槍男がやっと手を放したのを尻目に、話が通じそうな相手がようやく現れて安堵した。

「私は、武藤那月。東京から来ました。私こそ聞きたい。ここはどこですか？」

やっと明確な答えを得られると確信して言った那月を、その場にいる誰もが怪訝な顔で見つめていた。
先程は申し訳なさそうに那月の言葉待っていた彼ですら眉を寄せて

いる。

「だから言っただろうが。こいつは怪しい。おまえは引っ込んでろ。」

再び那月に近づこうと踏み出したシャンをちらりと見て黄土色の男は静かに、そして容赦なく言った。

「東京なんてここにはないよ。ここはオマハ。我々シャイアン族とルーグ族の土地の境目だよ。」

出現４（後書き）

誤字・脱字ありましたらご連絡お願いします。

会合1

テントの外で男達の何やらもめる声に怯えながらも、那月は自分の置かれた状況を把握しようと試みた。
「山奥の合宿所にきて、トラックにひかれそうになって、気づいたら原っぱにいて、あいつらに捕まって、それで誰も東京なんて知らない。と。」
何か見落としがないかきっちり確認しようと声にまで出してみたが、やはり意味が分からない。
謎の外人どもに捕まった上に、ここがどこかも分からない。
「東京知らないって・・・どんだけ田舎者だよ。あり得ないでしょ。」
今やアフリカの僻地に住んでいる人ですら東京くらい知っていだろう。
何か那月を騙そうとしているのだろうか。
（でも、そんな嘘ついて何の意味がある？）
それに彼らは、逆に那月の方がおかしなことを言っているかのように不審な目を向けてきた。

「あー、もう！誰か説明してよ。」
考えることを放棄してばたっと仰向けに倒れた。
意味が分からなすぎて、疲れた。
手を戒めていた縄も先程やっと解かれたばかりだ。
怪しさはぬぐえないものの、証拠がないからと先程の美形の青年が解いてくれたのだ。
「今日は、あの槍男が見張るって言ってたな。あいつには下手なこと聞くとまた首絞められそうだし。」
状況は分からないけれど、今すぐどうこうされる雰囲気ではなかった。

とりあえず身の安全を最優先しようと那月はひとり頷いた。

＊

「今夜はおれが中で見張る。」
「いや、だから誰か外で見張らせておけばいいじゃない。」
那月が一人悩んでいた頃、外で男たちは揉めていた。

「じゃあ、お前が代わるか？」
「いや、おれは・・・やめとくよ。だからその子は女の・・・」
「今はこんな状況だし人出が足りない。だが、信用できん奴には任せられん。特にあいつ側の人間には。」
いくら相手が華奢で弱そうでも、この時期に油断をする訳にはいかない。
いつもこういう状況では冷静な判断をするアルが、自分を窘めようとしてくることも訝しい。
「シャン。だから中で見張る必要なんてない。それにあの子はさ、」
まだ止めるかと口を開こうとした時、気に食わない微かな甘い香りが近づいてきた。

「信用できん奴っておれのこと？」
くくっと笑いながら、先程邪魔をしてきた男が鈍い金色の目を細めている。
「おまえ以外に誰がいる。この件には口を出すな。あいつを捕えてきたのはおれだ。」
誰かおれの話きいてよ、と呟くアルを無視して目の前の先程とはうって変わって酷薄そうな笑みを浮かべた男を睨んだ。
「駄目だよ、そんな怖い顔してちゃ。相手を油断させなきゃ喋るものも喋ってくれないだろ？さっきもおまえには反抗してるだけだっ

たじゃないか、あの子。」
「おれはお前の様なえげつないやり方が嫌いなだけだ。」
これ以上、この二重人格者と話をしていても腹がたつだけだと、シャンはテントに入ろうとするとささやくような声が追ってきた。
「ま、今夜のところは好きにしたらいい。明日の会合で有利になるように使わせてもらうさ。」

舌打ちをしながら、テントの入り口を押し上げると、中の人物が敷物の上に丸くなって横たわっていた。
「しまった、目を離した隙に・・・！」
舌でも噛んだのかと自分の不注意を呪いながら近づくと、こちらを向いた背中が規則的に上下している。
「まさか・・・寝てるのか？」
反応がないところをみると、間違いなさそうだ。
自ら命を断ったのかと思った。
「自分の立場が分かっているのか、こいつは。眠りこけるとは・・・。」
一瞬でも動揺させられたことに腹立ちながら、改めて不審者を眺めた。
妙な上着と下ばきから突き出た手足は信じられないほど白く、細い。まだほとんど子供といえる様な年齢だろう。訓練を受けた様子もない。
（こんな力ない者に危険な役目を負わせているのだとしたら、ルーグの器も知れるというものだ。）
揺り起そうとさらに近づくと、不審者は突然がばっと起き上がり、さっとシャンから距離を置いた。

「しまった！まさか寝てた！・・・あり得ない。」
シャンから目を離さず警戒を露わにしながらも、相手は呆然と呟い

た。
その頬には、敷物の刺繍の跡がついている。
（まさに、あり得ない。捕えられた上寝こけるような胆力のある輩相手では、手強そうだと思ったが・・・。）
「人がここまで近づいても気づかずに寝てるなんて。私としたことが！また首でも絞められたらどうする！」
思った事が全て口に出ているようだ。
（単に危機感がないだけか？しかし、こんな不注意な者をわざわざ選ぶというのもおかしな話ではある。）
シャンはやっと小さな違和感を感じた。
「おまえ家族はいるのか？なぜこのような役目を負わされている？」
（敵に捕まるかもしれない危険な役目を、無力な子供に押しつけるということは捨て駒ということか。）
すると、目の前の不審者は大きな黒い目を鋭くして固い声を出した。
「そんなこと聞いてどうする気？」
急に纏う空気が張り詰めたことから、何か相手の神経さわることに触れたとシャンは感じた。
「お前を釈放する気はないが、ルーグのやり方は気に食わんという話だ。」
言って、入り口の前に横になった。
「いやいや、ちょっとちょっと。あんた何してんの？まさかここで寝る気？」
何故か慌てた様子の不審者をちらりと見やる。
「仕方なく手足の拘束はしないおいてやる。だが横になってようが、少しでも怪しいそぶりを見せればお前に勝ち目はないぞ。」
力量差は歴然としているとはいえ、面倒事はできるだけ避けたい。
釘をさして、シャンは目を閉じた。

＊

（いくら怪しいからって、何故に見知らぬ男と一夜を共にしなきゃいけない？）
外はかなり暗くなっているようだ。
いつの間にか夜になっていたということだ。
―――こんな状況で寝れるわけないでしょ。
先程うっかり寝ていたことを棚に上げて、那月はため息をついた。
だいたい、眠っているときに近くに人の気配があればいつも目が覚めるのだ。
それを、あんなに近くまで来られても気がつかないとは何たる油断。
或いはこの男の気配がなさ過ぎるのだろうか。
（いやそんなことないでしょ。こんなでかい図体の男がそんなささやかな存在感なはずないよ。）
実際、１８０ｃｍを超えるだろう男が入ってきてから、割と広かったテント内はずっと狭く感じる。
巨大な肉食獣が目の前に悠然と横たわっているような錯覚に囚われる。
（空気すら薄くなっているような気がする。）
それはどうやらこの槍男が発する圧迫感の様なものだ。
（これは逃げるのは難しそうだ。取っ組みあっても勝てる確率２％位だな。）
ルーグとかいうのとは関係ないことを証明しないと自由になれそうにない。
しかし説得するにしても、もっと理性的なあの黄土色の目をした青年がいいだろう。
（この男は話が通じない。）

今日何度目かのため息をついて、那月は端に置かれた食事に目をやった。
「お腹すいたな。」
こんな状況でもお腹がすく自分にがっかりしながらなんとかそれら

から目をそらした。
何が入れられているかわからないものを食べるわけにはいかない。
辛い夜になりそうだった。

会合１（後書き）

誤字・脱字ありましたらご連絡お願いします。

会合2

突然周囲に影がさすと、強い風が吹きつけてきた。
思わず上を見やると自分を覆うほどに大きな鳥が舞い降りてくるところだった。
分厚く那月の身長ほどもありそうな広い翼を大きく動かしながら、鳥は目の前の男、シャンの肩へと降り立った。
獰猛そうな嘴と鋭い目をもつ大きな鳥を肩に乗せても力強く引き締まった体は揺らぎもしない。
堂々と背筋を伸ばし、その背を撫でる姿に、那月が時が止まったかのように見惚れた。

「何をしている、勝手にでてくるな。」

テントから顔を覗かせた那月に気がつき、男は厳しい声を出した。
同時に、肩に乗った鳥もこちらを向いた。
（かっこいい鳥だなあ。鷹に似てるような気がするけど。）
昨夜は、緊張と空腹で眠れないかと思ったが、今朝目が覚めて自分がまたしてもぐっすり眠ってしまったことに気がついた。
テントにはあの圧迫感を発する男がいなくたっていたので、思わず外の様子を窺おうとテントを出てしまったのだ。
ピーッ！と鷹が那月に向かって鋭い声を発した。
「わっ！」
驚いて思わず後ずさりする那月をちらりと見て、シャンは褒めるようにして鷹の背を撫でる。
「昨日はこいつがお前を見つけてきた。良くやったな。」
「・・・確かに昨日はおっきな鳥が空飛んでた・・・。あいつがスパイだったとは・・・。」
（鳥まで手懐けるとは、なんという無茶苦茶な連中だろう。）

男の注意が鷹に向いているのをいいことに、周囲を見渡して、那月は固まった。

朝特有の冷えてすがすがしい空気が澄んでいるのは、東京から離れた山奥に来たからだと思っていた。

遠くに連なる山々は鋭く、中でもひと際高い山は半ばまで雪で覆われそのシルエットがかなり険しいと物語っていた。頂上が雲に隠れて見えない。息をのむほどの高さだった。これまで那月が見たことのあるどこか丸みのある緩やかな山とは明らかに違う。

そして、広場を取り囲む森は鬱蒼と茂り、１０m先も見えない。その木々ですら那月が見たことのない種類のものだ。

この感じは、いつかテレビで外国の自然や動物たちを見たときと良く似ている。

どこがとははっきり言えないものの、どこかが日本と決定的に異なっている。

生息する植物や動物なのか、或いは空気そのものなのか、いずれにしろ自分の住む場所とは異なる世界があるのだなと感心したのを思い出す。

この違和感はまさにあの時の感じにそっくりだった。

「ここはどこ？」

足元が揺らぐような気がして膝をつくと、シャンと呼ばれる男が近づいてくる。

その逞しい体つきも、浅黒い肌や変わった眼の色、奇抜な服装や髪形もこの場には自然すぎるほどに馴染んでいた。むしろ唯一不自然なのは自分の方だ。

（そういえばあの原っぱで目が覚めてから、コンクリートを一度も見てない。）

足元の土の感触に、那月は呆然となった。

＊

さっきから皆がこの不審者にちらちらと視線を向けてくる。
会合場所に向かいながら、同行する仲間たちはこの不思議な子供に興味深々の様だ。
（無理もない。こんなにおかしな服装をした者は初めて見た。この様に白い肌も初めてだ。）
目の前の捕虜は昨日とはうって変わって、大人しく言われるままになっている。
昨日は疑われるとむきになって反抗してきたというのに、今はシャンの前で静かに馬に揺られているのだ。
抵抗を諦めたのかとも思ったが、どうもその真っ青な顔色が気になった。
「どうした？先程から聞いているが、気分が悪いのか？」
何度尋ねてみても首を振るばかり。
会合を前に青褪めているともとれるが、その姿は恐怖に慄くというよりは頼るすべのない幼子が道に迷ったような不安に近いような気がした。
「ここはどこなの？」
小さな声で聞いてくる質問はもう何度目か。
「ここはオマハ。シャスタの恩恵を受ける土地だ。」
答えるたびに、絶望したように唇を噛み締める。
最初はあれこれと質問を浴びせてきたが、今ではその元気もないようだ。
相手は子供とはいえ、ルーグの手先の可能性が高い。
だというのにシャンは、その心細げな様子のせいで昨夜から厳しい態度を貫き切れていない自分に気が付いていた。

――叔父貴の代わりを務めねばならないというのに、これしきの事で心動かされるようではならない。
自分を戒めるように、目の前の捕虜の体に回した腕に力を込める。
（あまりに細く頼りない。この柔らかさではまるで女のようではないか。）

「シャン。いくらなんでも強く抱えすぎでしょ。なんかますます顔色悪くなってるけど。」
はっとして顔をあげると哀れな捕虜はゲホッゲホッと咽ながら、シャンの腕を叩いている。
何やら忠告めいたことを言ってくるが、それを見てアルの目は面白そうに笑っている。
隣で馬を走らせながら、この男はずっと自分の様子を眺めていたらしい。
しまいには、くくっと顔を背けて笑い声まで上げる始末。
「おい、何がおかしい。」
不穏な声をあげるシャンを誤魔化すように、アルがなんとか笑いを納めて前方に注意を向けた。
昨日、那月を捕えた原っぱだった。

＊

「あちらもほぼ準備が整ったようだ。」
昨日の黄土色の目をした男が言った。
昨夜は、仲が悪そうだった槍男も衝突することなく前方を睨みつけている。
原っぱの反対側には、こちらと同じくらいの人数の人影が一列になってこちらに対峙している。

こちら側でも大量に運んできた荷物を並べ、馬を後ろに下がらせている。
ココア色の肌をした男たちの空気は張り詰め、無駄に声をあげる者もいない。
さっきの衝撃からうまく頭が回らなくなっていた那月だが、その緊張感に嫌でも意識がはっきりしてくる。
あちらの先頭にいた人影がこちらに進み出てくるのを見やって、槍男とたれ目の男と黄土色の男が、腰につけた刀やら弓やら槍やらをはずして仲間に渡す。
そして3人だけで、前方に歩いて行った。
原っぱの中央には敷物が敷かれており、あちらとこちらで3人ずつ横並んで座り何事か挨拶のような仕草を交わしている。
那月はというと縛られてこそいないものの、傍らの男に腕を掴まれている。
シャンとかいう凶暴な男よりは柔に見えるが、那月の敵う相手ではなさそうだ。
「あの、これから何が始まるんですか？あちらの人たちは何ですか？」
沈黙に耐えられなくなって、那月が聞くと横の男は困惑したように眉を寄せた。
「おまえあっちのルーグの人間なんじゃないのか？先の衝突があってから初めの会合だ。無事に終われればいいんだが。」
那月にとってはなんの答えにもなっていないことを言われ、憮然とする。
「だからルーグなんて知らないって言ってるのに。何のことやらだわ。」
投げやりに呟いた那月の声に、男がぱっと腕を離して驚いたように凝視してきた。
「おまえ・・・もしかして女か？」
「え？もしかしなくても女だけど・・・。」

「なんだって・・・・！！」
何やら騒がしくなる男たちを尻目に、那月のほうこそ動揺した。
「えっ！男と思われてたの？」
（心外！）
男たちは真偽を確かめるとでも言うように、わざわざ顔を覗き見たり、果ては胸やら腰やらを舐めるように見てくる。
（なにやら、ものすごく失礼な状況じゃない、これ！）
エスカレートしそうな男たちの様子に声を上げようとした所へ、アルが中央から戻ってきて指示を飛ばす。
「あれ持ってこい！それと酒！」
そしてすぐに那月に振り返ると済まなそうにした。
「悪いけど、あんたにも一緒にきてもらう。」

ぐいぐいと引っ張ってこられてやってきた中央でこちら側と相対している3人の男たちは、またしても妙ちくりんだった。
肌は大分日に焼けてはいるが、まだ那月に近い色をしている。
だが、動物の毛皮の様な服をきて、じゃらじゃらとアクセサリーを着けている。
中でも中央にいる男は、ものすごく存在感を発揮していた。
顔は精悍な男前だが、ふてぶてしそうに唇を歪めて、那月を興味深げに見つめている。
サバンナのライオンのように今にも襲いかかってきそうな迫力だ。
ーーーなんか、まずい雰囲気だ。

「昨日ここらで迷っているこの者を我々が保護したのだが、そちらの者だろうか？」
槍男が、若干事実を捻じ曲げつつ堂々と切り出した。
穴が開くほど那月を見つめたライオンはぱっと相好を崩して腰を上げた。

「探していたぞ！どこへ行っていたのだ、心配したはではないか。」
「はっ？」
まるで愛しい恋人でも見つけたかのように眦を下げる男には、全く見覚えがない。
「心細い思いをさせたな。済まなかった。」
「誰ですか？あなた。初対面です。」
油断ならなそうな雰囲気はどこへやら、ちょっと可哀想な人なのだろうか。
「そう拗ねるな。いいからこちらへ来い。」
（いやいや、こんなインパクトある人会ったら忘れられっこないっしょ！）
「間違いなく初対面です。こっちへ来ないでください。」
身の危険を感じ、思わずたれ目の兄さんの後ろに隠れる。
「おれの前で他の男の背に隠れるとは、なんとつれないことだ。」
男は那月を捕まえようと手まで伸ばしきた。
「っちょ何なんですか？変態！？」
思わず本音が零れたことを後悔する。
男の目がライオンさながらにぎらついていたからだ。

「何か様子が変ですね。」
黄土色の目をした美形の青年の冷静な声が割って入った。

ライオンの視線が逸れて、那月はほっと息を吐いた。
（喰われるかと思った。）

すると、ルーグとやらの男は俯き肩を震わせ始めた。
それに反して、彼の両サイドにいた男2人は那月に少しの関心も示していない。
むしろ顔を顰めてさえいる。
その様子をみて黄土色の青年はため息をついた。

「ロウ殿、からかうのはやめていただきたい。どうやら彼女とは面識がないようですね。」
ぶはっ、と吹き出し一人大笑いするロウと呼ばれた男と那月を交互に見て、目を見開いたのは槍男だった。
「おまえ・・・女だったのか！」
ますます大笑いするロウに加え、たれ目の兄さんまで笑い出し、槍男は呆然と那月を見つめてくる。
「私って、そんなに女に見えないかな・・・。」
おばけにでも遭遇したかのように自分を見る槍男に、さすが傷つく、と那月は思った。

会合2（後書き）

誤字・脱字ありましたらご連絡お願いします。

会合3

「ほんの冗談だ。気を悪くしないでくれ。おれもシャイアンの戦士と無闇に争いたくはない。」
殊勝な言葉を連ねながら悪びれた様子もなく、なんとか笑いを収めたロウは肩をすくめた。

那月の男疑惑の件で場の雰囲気が若干和らいでいる。
人を出しに使っておいて、その那月を放ったまま彼らはまた難しい話を始めた。

そんな中、ロウがさりげなく向かい合う3人の表情に目を走らせたのを那月は見逃さなかった。
（リラックスしてるように見えて、この人は分からないように警戒している。）
30代前後と思われるこのロウという男は、明るく気易そうに振舞っているが、その実、常に爪を研いで
相手の隙を窺っている。

それに比べて、こちら側に座る若者達は3者3様だ。
一番こちらに座るアルというたれ目の青年は、これが気心の知れた集まりだとでも言うように飄々として、面白そうに各々の表情を眺めている。
真ん中の黄土色の目をした美青年は、会合の場にふさわしくすっと背筋を伸ばし微笑みすら浮かべてロウに向かい合っている。
一番奥のシャンといかいう鈍い男は、不機嫌そうに眉間に皺を寄せながらあらぬ方へ視線をやっている。

（ばらばらだ、大丈夫なのかな、この人たち。）

首長らしきロウという男を中心に乱れのないルーグ側に比べると、こちらの男たちは何やら好き勝手な態度である。

表面上は緊張感は和らいだとはいえ、どこに地雷が埋まっているか分からないようなひやりとした空気がところどころに漂っている。那月が一言でも声をあげて妨げようものなら、たちまち地雷を踏みぬくような気がしてその場を見守るしかない。

（なんとか、あっちの仲間って疑惑は晴れたみたいだけど、これからどう扱われるか分からない・・・。）

槍男に至っては何やらまだ怒っているようで、舌うちでもしそうな顔で時折こちらを睨んでくる。

（あたしは一言も男だなんて言ってないでしょーが！自分が鈍いだけでしょ！）

と突っ込みたかったが、那月はぐっと堪えた。

「では、約定の証としてこいつを受け取ってやってくれ。我らルーグの戦士が仕留めた虎の毛皮だ。」

ばさっと無造作に広げられたのは、赤みの強い黄色と黒の鮮やかな縞模様の虎だった。

（狩って、皮を剥いだんだ・・・。）

虎だということが信じられないほど大きなその毛並みは豊かで、未だ風にふわりとなびいている。

堂々と狩りの様子を語る彼らが、この巨大な虎を仕留める獰猛な顔を持っていること、そしてそれを当たり前に受け入れているこの空気の異常さに、背中を汗が伝っていく。

最早那月は認めるしかなかった。

―――ここは日本ではない。まして虎を狩ることが日常なんて場所がまだこの世界にあるんだろうか。

「さすがは、猛る獅子の名をもつルーグ族ですねえ。こんなに立派な虎は見たことがありませんよ。」
相手を持ち上げるようなことを言いながら、少しも気持ちの籠っていない口調でのたまったアルがすっと膝を進めた。
「我らが首長よりはこちらを約定の証として、ロウ殿へお納めいただくようにと言付かっています。」
捧げるようにそっと差し出されたのは、１mを超えると思われる幾重にも枝分かれした角だった。
その仕草は、敬いが込められていた。
この角は彼らにとって特別なものなのだ。
鹿か何かの角なのだろう。
こんなに力強くて伸び伸びとした大きな角を持つ生き物がいるということに思いを馳せて那月は思わずほおっと息を吐いた。
（きっとすごく大きくて、堂々として、立派な鹿なんだろうな。）
この角に見合う逞しい体の孤高の鹿があの険しい山を振り仰ぐところを想像すると、胸が高鳴る。

「これは素晴らしいな。オオジカはシャイアン首長殿のスーリだったか。有り難く頂こう。」
耳脇で束ねた髪を荒々しく払い、身を乗り出して角を眺めていたロウは何気ない口調で切り出した。
「ところで、この度はラバサ首長はおいででないのか？なぜ秘蔵の戦士達だけを送れだされたのか？」
あたかも今思いついたかのように、首を傾げて聞いてくるところが却って嘘くさい。
見るからに気性の荒らそうな彼が、無理に丁寧な話し方をするところがちぐはぐすぎて不気味だ。
（何か重要な質問なのかな。）

一瞬空気が張り詰めた気がするのは気のせいだろうか。
少しの間をおいて、黄土色の目をした彼が口角をあげて微笑んだ。
その隣に座るシャンと那月の脇にいるアルの表情は一切変化がない。

「ロウ殿が気になされるのも当然のこと。我々シャイアンの事情につき合わせてしまい申し訳ない。首長は我々を試されている。」
「ほう？」
「首長は、この先シャイアンを任せる者の器を図ろうと我々を送り込んだんですよ。」
いかにも困ったというように肩をすくめてアルが付け足す。

おお、と手を打ってロウが破顔した。
「では、そちら方が時期首長候補ということか！これはこれは光栄なことだ。」
「おれはてっきり、ラバサ殿がこの会合においでなのは、なにかのっぴきならない事情があるのかと思ったが。」
くくく、と笑いながらも、獲物を見定めるライオンの様に瞬きひとつせずロウは続けた。
「例えば、この場に来られない理由でもあるのか、と。ラバサ殿もさすがにお年だからなあ。」

「ルーグの首長殿。」
それまで不気味なほど静かにそっぽを向いていたシャンが、ひたりとロウを見据えていた。
ただでさえ逞しい体が、腰を上げた訳でもないのに一回り大きくなったように見える。

「シャイアンのオオジカを侮辱されているのか？」
吹き寄せる風と共に、低い声が地面を這い、那月の体を縛りつけた。

シャンの青い目は怒りのためか色濃くなっている。
ルーグの首長以外の二人は咄嗟に腰をあげかけている。

「お前たちもとの位置に座れ。」
部下を静かな声で窘めながらも、ロウは細めた眼をシャンから離さない。
「よせ、シャン。」
顔は正面をむけたまま、黄土色の青年が静かに牽制し、シャンの方も渋々体の力を抜いたようだが、深い青色の目を相手から背けはしなかった。
「いや、無礼なことを言って済まなかった。おれも野次馬根性が治らんものでな。」
場をとりなす様に明るく言い放ったロウは、思いついたように那月の方を向いた。
「おい、そこの娘！酒をつげ！」

「え？」
張り詰めた雰囲気の中、いきなり振られて咄嗟に反応できない。
「こっちに来て酒を注げと言っている。早くしろ。」
ロウは大きな壺を差し出し、酒を注ぐには大きすぎる椀つきだしてくる。
「あ。」
あまりに高圧的に命じられて思わず壺を受け取ると、予想以上の重さによろけて壺を傾けてしまい、ロウの膝を濡らしてしまった。
「・・・すみません！」
（殺される！虎を仕留める様な輩に酒をぶっかけてしまった！どーしよ！）
慌ててジャケットを脱ぎ、ロウの膝を拭う。
恐る恐る目をあげてその表情を窺うと、二重のくっきりした大きな目を見開いて那月を凝視している。

（あああ、取り返し付かない！どうしよう、どうしたらいい？）
膝を必死に拭いながらも、僅かな希望を込めてシャイアンの3人を振り返る。
アルは明らかに「あちゃ～」という表情をしているし、シャンはますます眉間にしわを寄せて怒った顔をしている。
真ん中の青年だけは、何か面白い発見でもしたようにロウの表情を見守っている。
（いくら身内ではないにしても、乙女がピンチの時に助けもしないとは、こいつら～！）

自分の力でなんとか切り抜けるしかないと開き直った那月は、平謝りしかない！と向き直ると、ロウは一転して鷹揚な笑みを浮かべてこちらを見つめている。
「気にするな。いいから酒を注げ。」
ロウの視線が腕の先から這うように登ってくるのを感じて身震いする。
（なに、こいつのやらしい視線は！）
壺と椀をかたかた言わせながらなんとか白く濁った酒らしき液体を注ぎ、視線で促されて他の男たちにも同じように振舞った。

「なんであたしこんなとこで酌なんてしてる訳・・・。」

「我らルーグとシャイアンは兄弟も同じ。先の争いは水に流し、ここに絆を結び直したい。」
小さく呟いた那月をよそに、ロウは改まった口調で声を張り上げた。
男たちは相手の首領自らが杯を掲げるのに、ある者は躊躇いなく、またあるものはしぶしぶ杯を持ち上げ中身を飲み干した。

それぞれが持ち寄った食べ物やら動物の毛皮やらを披露しあう中、那月の緊張は嫌でも高まってきていた。

酌をさせられてから、ロウは那月が傍を離れるのを許さなかった。
（あたしは一体どうなるの？こいつらの仲間じゃないことは分かったみたいだけど、解放してもらえるのかな。）

（でも、こんなどことも知れない場所で放り出されてもどうしたらいいのか・・・。）
視線を彷徨わせ不安げな那月の様子を、ロウが目に留めたのが運のつきだった。

「この女子（おなご）はどうされる？そちらの者でもないのだろう？」
突然自分が話題に上り、那月はびくっと身を震わせた。
「こうしてじっくり会合を見聞きしたのだ。よそへやるわけにもいくまい。」
「身元が知れないのならば、おれが引きとろう。この抜けるように白い肌にはルーグの衣装が映えるだろう。」
にやにやとこちらを好色そうに見るロウの目は、何か良からぬことを考えているのを隠しもしていない。
こんな場でなければ、ワイルドな男前だわ、で済んだかもしれないが。
――嫌だ。碌な目に合わない気がする。
シャイアンとかいう彼らに捕まってからも、碌な目には合っていないが、このロウについて行って事態が好転することはきっとない。
だが、今この場に那月を庇ってくれる人間はいない。
無駄だと知りながらも、なんとか逃げられないかと周囲に視線を走らせると、槍男と目が合った。
口を真一文字に引き結んで、眉間にしわを寄せ、何かに押さえつけられでてもいるかのように腕を組んでこちらを睨みつけている。

（あんたは、最初からあたしを疑ってたんだからあたしがどうなろうが知ったこっちゃないんでしょーよ！）

「我々もすんなり彼女を渡すわけにはいかない。」
那月に救いの手を差し伸べたのは、またもや黄土色の目をした青年だった。
「彼女は、狼の縁を受けている。我々とて彼女が必要だ。」
重大な打ち明け事でもするように、重々しい口調だった。
「なに？それは本当か？」
ルーグ側の男たちの目線がさっと那月に集まる。
「あーあ、言っちゃった。」
アルが投げやりに呟いている。
「縁って、そんな大したことじゃ・・・」
「つまり、この娘のスーリということか？」
揃いもそろって、人の話を聞かない連中だ。
縁といっても、それは少なくともいい方の縁ではない。
（拉致されたんだか、食べられそうになったんだかは定かじゃないけど。）
思い出して、この訳の分からない状況は全てあいつが発端だという事実に辿りつく。
（あの犬！）
那月があさっての方向に怒りを滾らせる中、男たちの話は続いていた。
「そうか、そちら方の言い分も分かるが・・・。俺は何しろ珍しいものに目がなくてなあ。」
再び那月をじろじろと眺めて、困ったと息を吐いた。
「このように白い肌、艶やかな黒い髪は見たことがない。」
「そこまでロウ殿が望まれるのであれば仕方がない、我々が譲りましょう。その代わり条件を提示したい。」

「ちょっと、人を物みたいに言うのやめてよ！」
自分の身の振り方を勝手に決められそうになっていることに気がついて、那月は焦って主張したが、見事にスルーされる。
「そろそろ、我々もコメの民と直接交渉がしたいのですよ。あなた方を通すのではなく。」

にこりと笑む彼は、那月を助けようとしている訳ではなかった。
交渉のネタに那月を利用しようとしているだけだ。
（だめだ。自分の身は自分でなんとかするしか。）
仕留められることを知りながら背を向けて逃げる兎の様に、那月は半ば無駄だと知りながら手をつき脇に逃げようと飛び出した。
「ぶはっ！」
と、巨大な壁にぶつかり跳ね返りそうになったところを腕を掴まれ、そのままに壁に引き寄せられた。
温かな壁だった。

「この女は俺が貰い受ける。俺が見つけたのだから最後まで責任を果たすのが筋だ。」

恐る恐る壁を見上げると、そこにはこれまで敵とばかりに自分を睨み続けていたシャンの顔があった。

会合3（後書き）

間がかなり空いてしまいました。
また見に来て頂いてありがとうございます！

会合４

那月は仰天して壁を見上げた。
さっきまで、敵とばかりに睨みつけてきていた男がロウから自分を庇おうとしている、ように見える。
（今度は何！？）
昨夜、首を絞められたことは忘れていない。
このまま身を委ねていいものか分からない、昨日の続きが待っているかもしれない。
かといってこのままロウの元に戻るのも嫌だ。
さらには、虎やらを仕留めることもできる彼らを振り切って逃げきる自信もない。

「少し落ち着けよ、シャン。焦る気持ちも分かるけどなあ。」
場違いに暢気な声が固まった空気を打ち消した。
シャンを諌めるようなことを言いながら、口調はあくまで悠長だ。
声の主はまたしてもアル。
この男は、緊迫した空気をぶち壊すのがお得意な様だ。
何を言い出すつもりか、と那月が目を見張るのをちらと見て、アルは続けた。

「一目見た時から、シャンはこの娘に惚れ込んじゃったみたいで。」
仕方ないなあ、とでも言うように首を振りながらため息をつく。
「はあっ！？」
（何を言っているんだ、こいつは！）
体が自由でさえあれば、盛大に突っ込んでやりたい。
惚れるどころか、槍で刺されそうになったり、馬で蹴られそうになったりとひどい扱いだったのは那月が一番良く知っている。

「だが、シャン殿はこの娘を男と思っておられたようだが。」
疑わしげに眉を寄せてロウがこちらを見やる。
「世には男に絆を持つ者もいるとは聞いたことがあります。この男が他人にここまで執着するのも滅多にないことです。シャンの選んだ道なら、と俺も覚悟を決めかけました。結果的には女の子で良かったですけどね。」
あはは、とあくまでアルは軽いのりだ。冗談なのか真剣なのか良く分からない。
重々しい会合の雰囲気をものともしていない。

「おい、アル。」
ドスの聞いた声で真上から声がする。
「いいじゃない、間違ったことは言ってないよ。」
「シャン殿は一度我がルーグへ来た時、どんなに娘達に言い寄られても、一切興味を示さなかったと聞いているが。」
むっつりと表情を変えないシャンへの問いかけにも関わらず、またしても答えたのはアルだ。
「女嫌いのシャンがやっと見つけた娘なんですよ。ロウ殿程の男ぶりならば女など両手に余るはず。今回ばかりはシャンに譲ってやってもらえませんか？」

何やら話が完全におかしな方向に向かっている。
（こいつが私を気に入ったなんて話無理にもほどがある。）
だいたい、なんで突然那月をルーグに渡すまいとしているのかも分からない。
表情を探ろうと上を見上げても相変わらず視線はロウから離さず、肌がピリピリする緊張感を発している。
何を考えているのか全く分からない。

はあーっとため息を付いた黄土色の青年が両拳を敷物につけて軽く頭を下げた。
「ルーグの族長は話の分かる方だと聞いている。この朴念仁がこのように娘に執着するのも初めてのこと。ここは、譲っていただけないか。」
この男はこの男でさっき那月を餌に交渉を進めようとしていた割に変え身が早い。

自分を物々交換の品物か何かのように扱った、整った顔立ちの青年を那月はきっと睨みつけた。
（イケメンだと思ったけど、いけすかない奴！）
同時に真上からも、ちっ、と舌打ちがする。
この2人は仲間なんじゃなかったのか。
こんな場ですら、仲のいいふりもできないとは、呆れるしかない。

ロウは暫く黙っていたが、胡坐を組んだ足にひじを乗せ顎をついてくくっと笑った。
「シャン殿がそこまでその娘を気に入っているなら仕方がない。娘一人でシャイアンとの間に溝を作りたくはないからな。ここはひとつ貸しとさせて貰おう。」
さっぱりとした口調とは裏腹に最後にちらりと那月を見る目は、獲物を射るライオンの目だった。
思わずシャンのココア色の腕を掴むと、那月をどかすようにして前に出たシャンがロウの視線を受け止めた。
那月がぽかんとしていると、すぐにその腕を引いて、自分の定位置に戻り、自分の後ろに座らせた。
ロウから姿を隠すように自分の背に庇っているように見える。
（さっきと態度が違いすぎる・・・何を企んでるだろう。）
自力で逃げられず、あちらにも行きたくない那月は、広い背中を怖々眺めるしかない。

シャンが腰を下ろしたのを見計らって、隣の黄土色の男が背筋をただした。
「我らシャイアン、誇り高きオオジカの角にかけて約する。ルーグとシャイアンはイマカワナの森にて分かたれる。互いの許しなく境を侵さぬことをシャスタに誓約する。」
シャイアン側の3人が肘を曲げて両手を上に掲げた。
その声は良く通り、天に高く登るように響いた。
そして彼らは挑むような目を正面に向けて、沈黙した。

それを受けたロウは、3人それぞれに視線を走らせてゆったりと両手を掲げた。
両サイドにいる男たちもそれに倣う。
「我らルーグ、猛き虎の毛皮にかけて約する。シャイアンとルーグはイマカワナの森にて分かたれる。森の領域を許しなく侵さぬことをシャスタに誓約する。」
腹の底に響くような、どっしりとした声が宣言した。

―――映画のワンシーンにいるみたい。
男たちは、恐ろしく真剣な顔で向かい合っている。
それぞれが独特な衣装と装飾品を纏い、どうやらここは異なる場所に住む者達の取り決めの場だ。

それをそれぞれの仲間達が背後から遠く離れて一列に並び、言葉も発さずに緊張の面持ちで見守っている。
そして、彼ら全てを取り囲む広大な森と、さえぎる物のない青い空。
その遥か先には、巨大な山々が連なっている。

ここは一体どこなのだろう。
那月は改めて、呆然と周囲を見渡した。

会合４（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。
誤字・脱字ありましたらご連絡お願いします。

月1

那月は、気分が悪かった。
馬の上下動が追い打ちをかけてくる。
（なんでもいいから、とにかく落ち着ける場所に降ろして・・・。）
揺れの影響を受けないように、できるだけ馬の体にしがみつく。
そうすると、回された腕が腹に食いこんで更に吐気を覚える。

那月が女だと分かってから、場は大変賑やかになった。
興味深々に顔を覗きこむ者、やたらと話しかける者、挙句の果てには面白半分に触ろうとする者まで。
揉みくちゃにされなかったのは、強面の男が横でむっつりと陣取っていたからに他ならない。
那月をどのように連れていくかで場がざわめいた時にも、この男が有無を言わさず自分の馬に那月を乗せたために、残りの男達はしぶしぶ引き下がった。
スパイの疑いが晴れるまであからさまに警戒していたのに、ルーグの仲間でないと分かった途端に好奇心が抑えきれなくなったらしい。
厳めしい見かけによらず、ミーハーな連中なのかもしれない。
（私は動物園の珍獣か！）
那月からすれば、ココア色の肌に鮮やかな目の色、妙ちくりんな服装の彼らの方がよっぽど珍獣だが、如何せんここでは那月の方がマイノリティだ。

「だから、俺は何度も言おうとしたんだって！」
「どこがだ。お前はまた面白がって黙っていたんだろう！」
「シャンはいつも人の話を聞かなすぎなの。だいたい見れば女の子だって分かるだろ、普通。」
「こいつのどこが女に見える！お陰でルーグの奴らに付け込まれた

だろうが！」
頭上で飛び交う応酬にも突っ込みたい気持ちは、あるのだが何より気分が悪い。
「おまえも何故言わない！初めから言っておけばこんなことには・・・」
（あんた、最初から聞かなかったじゃないのよ・・・）
げっそりとしながら、恨みがましく背後をちらりと振り返る。
ああ、気持ち悪い。
「どうした、お前。顔色が悪いが・・・」
今更気がつくな。最早べったりと馬に寄りかかるしかない那月は呻いた。
「お腹すいた・・・」
どんな非常事態でも、正常に機能する自分の胃袋の繊細とは程遠い健康さにがっかりする思いだった。

「昨夜のやつ食べなかったの？」
正面に座ったアルが不思議そうに聞いてくる。
（あんな状況で食べれる訳ないでしょ！）
抗議したつもりだが、口の中のパンの様なものを噛むのに必死で、もごもご言ってるようにしか聞こえない。
空腹のあまり気分が悪くなった那月のためにか、頃合いだったのか、ココア色の肌をしたチンピラの集団は、会合の原っぱから4、5時間馬を歩かせたこの場所で荷を降ろした。
あたりは夕焼けに染まっている。
若い男たちがせっせとキャンプの準備を始めた。
木の棒を組み合わせて、昨夜と同じテントを作っている者もいる。
（今夜も外で寝るのか）
彼らに保護されているのか、軽く捕まっているのか謎だが、この鬱蒼とした森に一人放り出されても困る。
どこに行ったらいいのかも分からないし、食べ物も持っていない。

差し出された固いパンの様なものは、顎が外れるかと思うほど固い。
「良く噛め」
顎をさする那月を眺めていたシャンがぼそりと呟いた。
背に腹は代えられないので、必死にがじがじやっているとほんのり甘みがにじみ出てきた。
「おいしい・・・」
すきすぎた胃袋におちるとひりひり痛む様だったので、那月はゆっくり少しずつ飲みこんだ。

「それで、これからおまえはどうするつもりだ？」
少し離れた石に、腰かけたシャンが切り出した。
何故か那月と顔を合わせずに、横を向いている。
「連れて行って欲しい場所があるなら、俺が連れて行ってもいい」
今更それを聞くのかと思いながらも、ただ流されるままに彼らについてきてしまった状況を考える。
とにかく東京に帰りたいが、それにしてもここがどこなのか分からない。
そして、今この場にいる誰も東京など知らないと言う。
「家に帰りたいけど・・・。ここはどこ？」
彼らに会ってから何度となくぶつけてきた質問だ。
案の定、シャンは頭がおかしいのかとでも言うよう目を細め、アルは聞き分けのない子供を根気よく窘めるようにゆっくりと答えた。
まるで那月が、頭の弱い可哀想な子だとでも言うように、一語一語はっきりと。
「ここはオマハ。そして、今俺たちはイマカワナの森を進んでいる」
アルに負けず劣らずゆっくりと、幼稚園児に言い聞かせるように穏やかな声で再度尋ねる。
「だからそのオマハってのがどこかって聞いてるの。私はそんな地名聞いたことないんだよ」

肩をすくめてアルがシャンを振り返った。
（お手上げだね）
とでも言っているように見える。
沸騰した鍋を抑えていた蓋が、がたがた言いだしたようだ。
こんな風に、馬鹿にされるのは好きではない。
シャンはじっとこちらを見ている。
「よく思いだしてごらんよ。故郷に帰れない理由でもあるのかい？」
その変に優しい口調に、那月の苛立ちはピークに達した。
お腹も満たされて、むくむくと力が湧いてきたこともある。

「だから私の故郷は東京だって言ってるでしょ！おかしなことなんて何も言ってない！小さい子供相手みたいな話し方しないでよ！」
周囲にいた男たちが何事か、と目を見開いてこちらを見ている。
肩で息をしながら、地面についた手で土を握り締めた。
ひんやりとして少し湿った柔らかな土。
色々な可能性を探りながらも、一つの答えが頭の片隅に出来上がりつつある。
それをなんとか否定したくて、考えないようにしたくて。
「地図をかいて」
例えここがどこだったとしても、地理さえ分かればなんとかなる。
アルは、思ったより那月が深刻な表情をしていると気がついたのだろう、取り繕うような表情をやめた。
意外そうに那月を見ながらも、シャンは近くに落ちていた棒きれをとり、地面に書き始めた。
大きなトンガリ帽子を中心に左右に小さなトンガリ帽子が続く。
「これが母なる山、シャスタ。あれだ。」
シャンが指差した方向には、あの雲を突き抜けた頂上の見えない険しい山があった。
トンガリ帽子の左下に、変なマークを描く。一本の棒とその先端に６つの点を付け足している。

「ここは、ルーグの領域、草原だ。その先には砂漠が広がる」
中央には大きな木のマーク。
「シャスタのひざ元に広がるのが我らの森イマカワナ。俺たちは今このあたりにいる。」
草原と森の境目あたりをシャンが指差した。
森の右隣にはなだらかな山が描かれる。
「東は、ククルカの牧草地。丘が続いている。」
ひとつも聞きもらすまいとする那月を一度見上げてから、シャンは最後に一番下に波線と渦巻きを書いて棒を置いた。
「南は海だ」
この際訳の分からない地名は無視するとして、ここと似た地理に覚えがないかと那月は必死で頭を巡らせた。
あの迫力のある山をこれまでテレビでも写真でも見たことはない。
日本で砂漠があるのも鳥取砂丘くらいしか知らない。
もはや分かり切っていたことだが、ここが日本でないのでは、と敢えて小さく考えた。
「北に山脈、西に草原と砂漠、東に丘陵地帯で南に海、で中央に森か・・」
頭を抱えてじっと地図を睨みつける様子を注意深くシャンとアルが見守っている。
「ここは大陸なの？それとも島？砂漠があるってことは幾つか限られるか・・・」
世界地図を頭の中でめくり続けていると、微かに甘い匂いがしたので顔をあげた。

「面白そうなことをしてるじゃないか？」
両手に湯気のたつ器をもって、あの黄土色の目をした美青年が近づいてきた。
シャン程ではないにしても、かなり背が高く、刺青の施された腕は逞しい。

もはや美形だけの男じゃないと分かっていた那月は、わざと顔を顰めた。
「さっきはどうも」
会合で彼がとった行動を決して許すつもりはない、命に差し障りのない限り。
那月は、シャンとアルも彼のさっきの行動に不快感を抱いていると直感していた。
（ここで舐められちゃ困る。かといって怒らせてもまずい）
しかめっ面で目も合わせようとしない那月に苦笑して、器を片方差し出してくる。
「体が温まるよ。飲んでみて」
ああ、なんてタイミング！
喉がカラカラだったことを思い出してしまった。
それに器からはほんのり甘い匂いがしてくる。

「なにしにきた」
冷やかな声は、シャンからだ。
青い目がまたしても濃くなっている。
そんなシャンを一瞥して、すっと真剣な表情になった彼は屈んで那月と目線を合わせた。
「さっき会合では本当にすまなかった。私とて考えがなかった訳じゃない。だが君に嫌な思いをさせた」
しまいには那月の右手をやんわりと捧げ持つようにして目を覗きこんでくる。
アーモンド型の目にシミ一つない肌、形のいい唇。
瞳が光に当たると金色に見える。
その瞳が心なしか潤んでいる。

目が逸らせなくなっている那月に囁きかける様にして、彼は続けた。
「私は、タロウ。そう呼んでくれ」

「たろう？」
「ああ、それが私の名だ」
蕩ける様な笑みで彼が答えた。
（たろう？タロウ？・・・太郎！？）
もはや耐えられなかった。

地面を叩きながら笑い転げる那月をそれぞれが呆然と見守っている。
「太郎って、あっはは！普通ー！いやいやかえってレア！？あーははっ！その顔で太郎！太郎なのにかっこつけてる！きまらないわあ！はは・・・げほっ！！」

なぜ自分は笑われているのか。
もしかしたら女性にここまで笑われるのは、しかもどこか馬鹿にしたような笑い方をされるのは初めてかもしれない。
タロウと名乗った青年は信じられないものでも見るように腹をかかえてぶるぶる震える物体を見下ろしている。

シャンはシャンでタロウに靡かない女がいることに驚いていた。
タロウがその気になった時に、彼から目を逸らせる女などいないのだ。
那月は見惚れるどころか、笑い転げている。
アルも同じことを考えているようで、最初こそ驚いていたが、呆然とするタロウを見てにやにやしている。
「あー、そうだったそうだった！名前を名乗ってなかったんだ！」
固まっているタロウをわざとらしく押しのけて、笑いすぎてせき込む那月の背を撫でてやっている。
「俺はアル。その目つきの悪いのがシャン。出会ったときバタバタしちゃったから言いそびれちゃったねえ、君の名前は確か・・ムトー」

（バタバタした、の一言で片づけやがった）
時々、この親友の図太さが羨ましくなる。
得体が知れないとはいえ、自分が昨夜掴んだ首は折れそうなほど細かった。
自分のごつい手を眺めて、ぐっと握り締めた。
敵であれば、首を絞めるのに何のためらいもないが、相手が女だったというのは寝覚めが悪い。
「私は那月。武藤那月」
目尻の涙を拭っている。
何が面白いのか分からないが、まだ笑いの波が引いていないらしい。

「女の子はそんなに大声で笑うものじゃないよ」
引き攣った表情でタロウが、暗に非難する。
確かに、女が感情を露わにするのは褒められたものではないが、何故か那月を窘める気にはならなかった。
初めて笑っている顔を見たからかもしれない。
（これを初めから見てれば、男と間違うことなどなかった）

ふとこちらを向いた那月の表情が突然固まり、息をとめた。
目を見開いて、口をぽかんとあけたままシャンの背後を凝視している。
何事かと振り返ると、月が姿を現したところだった。
「今日は満月か」
もうそんな時間かと何気なく呟いたシャンの言葉を、那月が頼りなげな声で聞き返した。
「月？」
瞬きを忘れたように空から目を放さない。
空の３分の１を占める程の銀色の見事な月だった。

月1（後書き）

大分間が空いてしまいました。
お越しいただいてありがとうございます。

月2

夜の空気が肌に寒い。
けれども、那月はなかなかその場を離れる気になれなかった。
彼らが月と呼んだものは、見慣れた月と大分違っている。
冷たい白銀色をした表面には、クレーターが見える。
表面の凹凸がはっきり見えるほど、その月は大きかった。
まるで遠く離れたところにあった月が、隕石の様にこちらにむかって落ちてくるみたいだ。
その錯覚のせいか、緊張で手足は冷たく力が入ってしまい、息も心なしか苦しい。
それでも目が離せない。
涙が頬を伝う。
慣れない恐怖で後ずさりたい意思が働いているのに、磁石のように惹きつけられる。
（なんてきれいなんだろう）
焦燥感に、那月は足をかかえて自分を地面に押しつけた。

空を見上げて動こうとしない那月に困惑しながらも、皆テントの中なり火の周りなりに移動してしまった。
アルなどは体が冷えるから、と一緒に連れて行こうとしてくれたが、尋常でない様子に諦めたようだった。

どれだけ時間が経った頃か、クンクン、と犬が鼻を鳴らす声が聞こえた。
割と近い場所からするその鳴き声は、誰かを探しているのか、迷子の子犬の様に不安げで微かだ。
夢から覚めたように突然視界が開けて、周りの音が耳に入ってくる。

（誰か犬を連れている人がいたかな）
周囲に人はいないから、誰もこの鳴き声に気付いた様子はない。
「しょうがない、私が連れ戻してやるか」
あわよくば、ふかふかした毛並みを撫でられるかもしれない。
訳の分からない連中に囲まれて、彼らの思惑に振り回されて緊張しっぱなしだった。
警戒する必要のない無垢な動物に無性に触れたかった。

ジーンズに付いた砂を払って、注意深く声の聞こえる方へ近づいてみる。
テントの間を縫って暗い森の迫るところまで行くと鳴き声が大きくなった。
「どこにいるの？こっちへおいで」
響かないように、小さな声で優しく呼び掛けると、キュンキュンと返事が返ってくる。
「ちょっと待っててね、すぐ行くよ」
相手を怖がらせないように姿勢を低くしてゆっくりと森の闇に近づくと大きな黒い塊が木の陰にたたずんでいる。
その大きさに、ぎくりと足がとまる。
（大きい・・・これは犬？野性の動物かもしれない、暗くて見えない）
刺激しない様にゆっくりと足を後ろにずらそうとしたら、突然動物が地面にぼすっと伏せて尻尾を大きく振りだした。
那月の怯えを察して、襲う気がないと意思表示したように見える、知性を感じる動きだ。

「油断させて襲う気じゃないでしょうね、あたしはおいしくないよ」
きゅーんと鼻をならす。
「わかった、いきなり立ち上がるんじゃないよ、ちょっと近づくだけだからね」

牽制しつつも、ちょっとずつ黒い動物に向かって近づく。
辛抱強く那月を待つのが分かって、あと一歩のところまで近づくと、
木の合間から射した月光が目の前の動物を照らし出した。
光にあたって艶やかな銀色をした毛並みとぴんとした三角の耳、黒
曜石の眼。

「あーっ、あんたはあの時の！」
やっと分かったか、とでも言うように得意げに尻尾を振りべろりと
那月の手を分厚い舌で舐めた相手は、
ここで目覚めた時に隣で寝そべっていた巨大な犬だった。

「ばか！ばか！あんたのせいで！大変な目にあったんだからね！」
安心したのか腹立たしいのか、涙目になりながら那月はがつっと犬
の胴体にタックルをかました。
犬はその勢いのままごろーんと仰向けになり腹をみせて嬉しそうに
している。
「おばか！遊んでるんじゃない、私は怒ってるんだよ！」
ばしっと叩こうとすると、じゃれるようにその手に纏わりつかれる。
もうどうしようもなく無邪気に遊んでいるようにしか見えない。
「懐くな！元の場所に戻してよ！」
温かい舌がべろべろっと那月の涙を舐める。
「あんたがここに連れてきたんでしょ、何とかしてよ・・・」
こんな動物に訴えてもしょうがないと分かっているけれど、小さく
呟いた。
本当は、こいつが連れてきたのかどうかも分からない。
今では、分かっている。
一匹の獣が獲物を引きずってくる様な、そんな簡単は場所ではない
だろうということは。
「どこなの、ここは」

じっと下から那月を見つめていた犬は、突然すくっと立ち上がり袖を咥えて軽く引っ張った。
「なによ、また変なとこに連れてこうっての」
きゅーんと耳横に倒して訴えるてくる。
「そんなしょんぼりして見せたって駄目だよ」

二人（一人と一匹？）の間で無言の攻防が行われた後、那月はしぶしぶ大きな犬についていくこととなった。
「毛皮はずるい。反則」
左手でそのふかふかした毛皮を撫でながら、導かれるままについていく。
それにしても、大きい犬だ。
那月の腰の当たりまである。
（そういえば、あの人たちは狼っていってたっけ）
毛並みが美しい銀色だということと、犬よりもかなり大きいことを覗けばそんなに大きな違いはないような気がする。
振り返ると、木々の間から明りの灯った空き地が見える。
「後で絶対にここに戻してよ、約束だからね」
相手が頷いたようだったので、ひとまず心配は少し減った。
夜明けまでに戻れば、置いていかれることはないだろう。
闇しか見えない森の中を、那月は傍らの温もりだけを支えにして歩きだした。

月2（後書き）

お越しいただいてありがとうございます。

月3

３０分程歩いただろうか。
ようやく進む先の木々が途切れてきた。
傍らの狼がひた、と立ち止まり、鼻先をあちこちに向けて匂いを嗅いでいる。
時折耳がぴくっと動いて、那月には聞こえない音を拾っているようだ。
「どうしたの？何かいる？」
那月には、相変わらず得体のしれない闇しか見えないし、自分たちの息遣いと時折聞こえる虫やフクロウの声しか聞こえない。
不安になって狼の背中に乗せた手をぐっと力を込めると、ぱたっとふさふさした尻尾でお尻を叩かれた。
（心配するなってことかな）
しばらくして、何か納得したのか再び歩き出した相棒に連れられて木々の途切れた先へと足を踏み出した。

突然目の前に現れたのは、泉。
暗く静かな水面に、星の様にぽつぽつと小さな青白い明りが浮かんでいる。
気ままに吹くささやかな風だけが、水面に僅かな波紋を作っている。
泉を囲んで木々が途絶えたそこからは、あの大きな月が覗いていた。
那月がぼうっと立ちすくんでいる間に、狼は迷いなく泉に近づき、一瞬辺りを見回してから水を飲み始めた。
恐る恐る足を踏み出して泉に近づいてみる。
足元には、百合の様な白い花がところどころ集まって咲いている。
風が吹くと、微かに甘い香りがした。
「わ・・・、この青い光はなに？」

泉の中で小さな青い光があちこちで、灯っては消え、灯っては消えしている。
「きれいだな。何かの虫？魚かな？」
泉の底は暗すぎて、何も見えない。
空から落ちてきた星の様に瞬いているのが、美しい。
水際にたって目をつむり、すうと息を吸い込みまた目を開ける。
「夢の中にいるみたい」
目の前にもやがかかったように、これが現実とは思えない。
「だっておかしいじゃない？このこと野性動物についてきちゃったりして。私どうかしてるんじゃないの」
なんだかおかしくて笑いがでる。
「起きてみたら、自分がどこにいるのか分からなくなってたなんてあり得ないでしょ。森の中に一人で放り出されてるなんてさ」
誰かに同意を求めたくて、傍らの犬ににっと笑いかける。
「でも、夢なら醒める。夢じゃなくても誰かが迎えに来る」
視界がぼやけるので、目元をぬぐった。
「でもさー、私には探しに来てくれる人なんていないんだよ。どうやって戻ればいいのさ」

その時、微かに声が聞こえた。
動物の鳴き声の様に高くてぴんと張った声がした。
すると、隣の犬がすっと頭を上に向けて月を見上げた。
冷えた空気に溶ける様に澄んだ歌声が、響き渡った。
気持ちが良さそうに目を閉じて喉を震わせている。

「これって狼の遠吠え？」
那月には歌っているように聞こえる。
しばらくすると、彼方の山の方から、同じような歌声が届いた。
（仲間と話してるのかな）

青白い小さな光と、白くて甘い匂いのする花に囲まれて、幻想的な光景だった。

那月がうっとりとしていると、銀色の犬はじっと那月をみつめている。

一度頭で那月をぐっと撫でてからまたじっと見つめてきた。

「私にもやれってか？」

こわごわ尋ねると、手の甲をべろっと舐めて腰を降ろした。

「歌うのは好きだけど、あんたたちみたいには歌えないんだって」

那月がうろたえている間にも、遠くから心細げな歌声が届いてる。

「ちょっとあんたが答えてやらないから、なんか心配そうだよっ」

そんな那月を横目でみて、相手はどしっと「やだ」とでも言いたげに横たわってしまった。

尻尾まで振っている。

「こいつめ・・・」

そもそも犬相手に会話してる気になってること自体、頭がおかしくなってるんじゃないかとやけっぱちになって考える。

「もうどうせ訳がわかんない状況なんだ。どうにでもなれっ」

那月は、犬の真似をして、大きな月を見上げた。

（やっぱりきれいだ）

すうっと息を吸い込んだ。

月4

今夜は満月だ。
逆光とは言え、先をゆく者の影ははっきりと見える。

風の向きを確認して、相手に自分の匂いを悟られないよう微妙に体の位置をずらしながらも、シャンは目線を逸らさない。
心細げに歩く姿は、ほんの少女だとしても森に住む者でないことが分かる。
傍らの獣も、普段はこのような歩きやすい道筋は選ばないだろう。
草の背が低く開けた場所を歩くということは、周囲から自分を見つけやすくすることになる。

突然狼が立ち止まり周囲を探り始めたので、シャンは更に身を縮め気配を消した。
怪しむ様に後方のこちら側に耳を向けている。
そもそも人間よりも数段感覚に優れた動物に気がつかれずに追跡するのは、至難の業だ。
（気がつかれたか？）
シャンは息をつめたが、狼は何事もなかったかのように少女を促すようにして先を進みだした。
（多分、俺がつけていることに気が付いてるな）
それでも、逃げるでもなく襲ってくるでもない。
あの狼は少女をどこに連れて行こうというのか。
ぼんやりと満月を見上げていた少女が突然野営地を離れていくの気がついたシャンは、こっそり後をつけてきたのだ。

このまま野営地に戻っても構わない。
あのナツキと名乗った少女は、確かに不審なところが多いが、彼ら

に害をなす者ではないようだ。
どこへなりとも、行きたい所へ行けばいい。
あの手に負えない女好きのルーグの首長の手からは守ってやったのだから、ある程度義理は果たしただろう。
頭ではそう考えてみるものの、目は少女と狼の姿を追ってしまう。
どうやって帰ればいいのか分からない、と心細げに呟いた姿が頭から離れないのだ。
（ちっ、面倒だが女子供を見捨てたようで寝覚めが悪い）
どちらにしろもやもやするのであれば、最後まで見届ける方がましか。
らしくないことをする、と自分でも思いながら、にやにや笑いのアルの顔を思い浮かべてシャンは顔を顰めた。

改めて後を追おうとしたところで、遠くから狼の遠吠えが聞こえてきた。
間を開けずに少し先からそれに答える声がする。
（仲間と連絡でもとっているのか）
狼の目的地はどうやら森の開けた場所にある泉だったようだ。
月明かりに照らし出された泉の淵に、あの少女が月を見上げて立っていた。
シャンは彼らの姿が良く見える茂みを見つけたところで、はっと顔をあげた。

透き通るような、のびやかでそれでいて甘い声が空へと登っていった。
すーっと月へ向かう声が、シャンの体へも降り注いでくる。
涼やかで清い風が、体の中まで洗い流して通り過ぎたように感じた。
真摯に月を見上げながら、少女の目からは涙が伝っていた。
それでも歌い続ける姿は、近寄りがたく、シャンはただ見つめた。
遥か彼方からは、少女の声に答えるように狼たちが歌っていた。

＊

温かくて、ふわふわ揺れていて、ほっとできる何かに包まれている。
那月は、もう少しで目が覚める心地よい淵を漂っている。
頑張って瞼を開けようとするのだが、体を包む温かさがまた那月を眠りに誘おうとする。
ずっと何か不安で冷たくなっていた気持ちが、緩やかにほぐされていくような気がする。
心地よさの中を漂っていると、低くて微かな声が降ってくる。
「おまえを心配する家族はどこにいる」
突然黒い闇が意識を覆ってきて、那月は身を縮めた。
すると、守るように更に温かいものに包み込まれて、ほっと息を吐いた。
どこかで嗅いだことのある香りを吸い込むと、更に安心して那月は体の力を抜いた。
（ずっとここにこうしていたい）
再び、穏やかな眠りの海へと落ちて行った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4389l/

狼の詩

2011年7月12日21時01分発行